

令和4年度 学校自己評価

| 中央国際高等学校 | | A | ほぼ達成 (8割以上) | B | 概ね達成 (6割以上) | C | 変化の兆し (4割以上) | D | 不十分 (4割未満) | 評価 | A～Dの4段階評価とする | |
|--------------|--|--|-------------|---|-------------|---------|--------------|---|------------|----|--------------|---|
| 教育目標 | | <ul style="list-style-type: none"> 心身ともに健全で知性にあふれ情操豊かな青少年を育成する。 社会で生き抜く力を身につけることのできる学習環境を地域社会と連携して構築する。 | | | | | | | | | | |
| | | 目標及び実績 | | | | 自己評価 | | | | | | |
| | | | | 達成状況申告 | | 所見・特記事項 | | | | 評価 | | |
| 今年度の目標 | | 方 策 (目標達成に向けた具体的な手順や時期等) | | 目標の達成状況・次年度への課題 | | 達成度 | | (評価の理由を記するとともに、特筆すべき実践がある場合はその事実を記入する) | | | | |
| I 組織運営 | <ul style="list-style-type: none"> ①人材育成 ②情報共有 ③人材確保 | <ul style="list-style-type: none"> ①質の高い教育を提供するために組織的な人材育成を進め、職員一人ひとりの資質向上を図る。理念の共有、職員同士の相互理解、職員個々の経験の尊重と学内、学外での研修を実施する。 ②個々に持つ情報を共有し、諸問題の解決、情報、技術の属人化を防ぎ、学習等支援施設も含めたより強固な組織作りと質の高い教育を提供できる学校運営を目指す。 ③生徒数増加に備え、科目に偏りなく教務職員を増員する。在職職員からの紹介、近隣大学への採用募集周知を強化する。 | | <ul style="list-style-type: none"> ①②職員一人ひとりの目標の明確化、学校の目標の明確化が必要。情報共有は概ねできているが、業務分担における属人化の是正は不十分である。また、研修については、学外の研修に参加する機会が限定されてしまった。 ③中途の教務職員を1名採用したが、短期間で退職。また、もう1名の退職者が出て、人員の配置に苦慮した。今後も増員が必要である。 | | B | | <ul style="list-style-type: none"> ①②年度末の繁忙期に事務方の依頼を受け、教務職員が履修登録などを引き受けるなど、業務分担は進展した。ただし、課題である属人化は完全に解消できておらず、令和5年度以降の課題として残った。情報の共有については、月2回の校舎会議の開催などで改善が見られた。 ③本校所在地の人口減少、特に若者の流出により、若手職員の採用が難しい状況が続いている。遠方の方を採用し御宿に移住してもらう形となっている。これが継続していけるかどうかは疑問もあり、千葉県内での採用のため、千葉県私学協会のリストの利用や県内大学への告知も、継続していく。最も近隣の大学からは、採用に成功しており、継続して関係を維持していくことが重要と考えている。 | | | | B |
| II 教育活動 | <ul style="list-style-type: none"> ①学習習慣と学力の定着 ②適切な進路指導 ③国際交流機会の提供 ④地域交流 | <ul style="list-style-type: none"> ①年2回ある御宿での集中スクーリングへの参加率を高め、レポートの指導を徹底して行うことで、着実に3年間で卒業できる生徒を育成する。②3年生では、とくに推薦などで進学を希望する生徒が多い現状に鑑み、小論文指導や面接指導など、単位取得以外の進学に必要な学習にも力点を置いていく。③集中スクーリングにおいて近隣大学の留学生をゲストとして招待し、生徒と交流機会を提供する。様々な国籍で、さまざまなバックボーンを持った留学生との交流が生徒の大きな財産となっている。④集中スクーリングで宿泊する民宿やボランティアの方々との交流を育んでいく。地域社会の一員であるという意識の醸成を図る。 | | <ul style="list-style-type: none"> ①宿泊を伴う集中スクーリングを従来の形式に戻し(宿泊数の増加)、本校の職員が生徒に直接指導する時間が大きく増加。結果としてスクーリングやレポート課題のスムーズな完了につながった。 ②進学、就職と殆どの生徒が進路を決めることができたが、進路未決定の生徒を0人にするのが今後の課題であり、学校の使命である。 ③留学生との交流はまだ再開できず、今後の課題となった。 ④地域の方々との交流については、スクーリングボランティア、民宿での宿泊再開ができた。 | | A | | <ul style="list-style-type: none"> ①新学習指導要領の下では、初の集中スクーリングとなった。コンテンツを改めて見直し、全く違う内容に取り組む科目もあったが、事前準備にしっかりと取り組んで、成果を挙げる事ができた。グラウンド横にビニールハウスを新設し、メロンの水耕栽培を行って、それをコンテンツに組み込むなど新たな取り組みにもチャレンジした。また、ICT教育の一環として、レポートの作成、提出、採点をパソコンのシステム上で行う取り組みを行い、生徒の利便性も向上した。 ②コロナ禍によって登校制限も実施していく中で、オンラインなども活用しながら進学指導を実施した。制約の多い中ではあったが、大半の生徒が進学や就職など、自らの進路を決定することができた。 ③留学生との交流は、令和5年度以降の課題である。また、外国籍の生徒が増加しており、異文化を理解しながら指導を行う機会が増えている。 ④徐々に地元との交流を再開することができた。とくに民宿の方とは、コロナ禍以前の状況に戻ることができたと考えている。それ以外にも、交流の場は増えている。 | | | | A |
| III 安全・保健 | <ul style="list-style-type: none"> ①学校環境及び生活の管理に留意し、安全な学校生活が送れるよう配慮する ②コロナ禍における感染対策の徹底 ③行事、スクーリングにおける安全管理、機器・用具・火などを使用する際の安全管理の徹底 | <ul style="list-style-type: none"> ①校舎・教室・校地等設備の安全確認・整備に留意し、教職員に周知する。 ②生徒の登校制限や登校時の消毒などを徹底した。また、集中スクーリングにおいて感染防止のための様々な対策を実施した。 ③各種実施要項に安全面の対策を盛り込み、行事・スクーリングを実施する。行事担当責任者、授業担当者が認識をしっかりと持ち、実施に当たっても責任をもって実行する。 | | <ul style="list-style-type: none"> ①責任者を中心に全職員が確認・点検・整備を分担・担当し、大きな事故もなく、1年間を過ごすことができた。 ②職員が危機感を持って取り組み、生徒・職員の単発の感染はあったものの、クラスターなどを発生させることなく過ごすことができた。 ③スクーリングをはじめとする学校行事を少しずつ、再開し、問題なく、運営をすることができた。 | | A | | <ul style="list-style-type: none"> ①全職員が確認・点検・整備を担当する体制を作ることが求められていたが、その第一段階として、学校全体の管理を分担しながら、職員全員で行っていく体制を整えることができた。 ②職員が危機感を持って取り組み、クラスターなどを発生させることなく過ごすことができた。生徒、職員とも何名かの発症はあったが、校内でも広がりはないと見て、収束させることができた。対策のための備品などもしっかりと準備することができた。 ③対面でのスクーリングを経験するのが初めての職員もいたが、コロナ禍以前の方法に立ち返り、生徒の確認などを徹底していった結果、大きな事故もなく、ほぼ半年に渡るスクーリングを完遂することができた。また、スクーリング以外の学校行事についても、一つ一つの手順を確認しながら、安全な運営を達成することができた。 | | | | A |
| IV 連携 | <ul style="list-style-type: none"> ①生徒、保護者との密な連絡・面談等を実施し、良好な信頼関係を築く ②地域との連携強化 ③学習等支援施設との連携強化 | <ul style="list-style-type: none"> ①学習等支援施設も含め、日々、生徒の様子に注視し、コミュニケーションを密にとり、必要に応じて面談を実施する。定期的な保護者と連絡をとり、生徒情報を共有し、問題点があれば一緒に解決していく。必要に応じて三者面談・保護者会等を開催する。 ②ビーチサッカー大会の開催にあたっては企画、運営の中心となり、地域の活性化の一翼を担う。大会の規模を拡大し、付随するイベントとして御宿夏祭りや天体観測会なども合わせて実施する。 ③生徒の多くが日常を過ごす学習等支援施設との連絡を密にし、本校との間で生徒情報の食い違いのないようにしていく。 | | <ul style="list-style-type: none"> ①生徒への登校制限を引き続き実施したため、通常時以上に生徒・保護者への電話、メールでの連絡を頻繁に実施した。その際は、体調のチェックなども欠かさず実施した。 ②ビーチサッカー大会を2日間に渡り、開催した。まだ、コロナの影響下にあることは否めず、参加チームの確保には苦戦したが、参加してくれた選手の満足度は高かったと言える。 ③定期的な連絡会議を実施しているほか、随時、訪問、電話連絡などで生徒情報の共有を図った。 | | A | | <ul style="list-style-type: none"> ①生徒への登校制限を実施したため、学習等支援施設とも協力をしながら、通常時以上に生徒・保護者への電話、メールでの連絡を頻繁に実施した。その際は、体調のチェックなども欠かさず実施した。また、ICT教育の一環として、生徒にパソコンを持たせ、レポートの提出は、全てネット上で行った。問題なくやり取りができ、効率化を図ることができた。 ②集中スクーリングを再開できたことで、地域の民宿など、交流を再開することができた。また、ビーチサッカー大会を2日間に渡って開催することができ、微力ながらも地域の活性化への貢献となったと考えた。また、小中学生や高校生、一般の方など、千葉県以外からの参加も思った以上にあり、交流を促進することができた。 ③学習等支援施設との連絡をしっかりと取ることにより、集中スクーリングの運営や生徒の単位取得などを、よりスムーズに行うことが可能となった。 | | | | A |